

命のパン屑

奨励	入 治彦【いり・はるひこ】
奨励者紹介	日本キリスト教団京都教会牧師 京都刑務所教誨師

イエスはそこをたち、ティルスとシドンの地方に行かれた。すると、この地に生まれたカナンの女が出て来て、「主よ、ダビデの子よ、わたしを憐れんでください。娘が悪霊にひどく苦しめられています」と叫んだ。しかし、イエスは何もお答えにならなかった。そこで、弟子たちが近寄って来て願った。「この女を追ひ払ってください。叫びながらついて来ますので。」イエスは、「わたしは、イスラエルの家の失われた羊のところにしか遣わされていない」とお答えになった。しかし、女は来て、イエスの前にひれ伏し、「主よ、どうかお助けください」と言った。イエスが、「子供たちのパンを取って小犬にやってはいけない」とお答えになると、女は言った。「主よ、ごもつともです。しかし、小犬も主人の食卓から落ちるパン屑はいただくのです。」そこで、イエスはお答えになった。「婦人よ、あなたの信仰は立派だ。あなたの願いどおりになるように。」そのとき、娘の病気はいやされた。

(マタイによる福音書 15章21―28節)

さまざまなイエス像

私たちがイエスの顔を思い浮かべる時、それはどんな顔をしているのでしょうか。聖画に描かれた顔の印象から、金髪碧眼のやさしい顔をしたイエス像を思い浮かべるでしょうか。それとも、ルオーの描いたイエス像、鼻がとても長く鬚をのばしていて、黒目がちな目をしたロバのような風貌を思い浮かべるでしょうか。3年前程スペインのカトリック教会にあったガルシア・マルティネスの描いた「エック・ホモ」（この人を見よ）という壁画が傷んでいたので、教会のある人がその修復をしたら、おかしな絵になってしまった。けれども、かえって見物人、観光客が後を絶たないといったことが紹介されていました。「パッション」という映画のイエスは、一番キリストに似ていると言われた俳優が使われていました。今から数年前にイギリスのBBCが放送したドキュメンタリー番組「神の息子」では、2000年前のイスラエル男性の頭蓋骨から復元し、髪の毛や肌の質感は、3世紀の頃のフレスコ画に残るイスラエル人男性を参考にし、黒い巻き毛と濃い肌色の丸顔で丸い鼻をした中東男性のものでした。フィリピンの画家リノ・パンテボンが描いたイエス像は「怒りのイエス像」でした。南北問題で、イエスが南側に立って北側の国々を糾弾するかのような印象でありました。そんな絵を見ると、案外私たちの思い描く柔和なイエス像が私たちの願望であることが多いのではないかと思います。

カナンの女とイエス

先ほど読んでいただいた「カナンの女の信仰」のイエスも、初めて読んだ時には、イエスがこの女性の懇願に対してつれない印象がありました。最初の問答の拒絶の姿勢は、イエスの一般的なイメージからかけ離れて見えて、戸惑いを覚えられた方も多いのではないかと思います。イエスがティルスとシドンの地方に行かれた時のことです。そこはフェニキアの海岸ペリの町で、イエスがガラヤや伝道からエルサレム伝道へと転換していくその転換点、北方への旅をされた時のことでした。フィリポ・カイザリアでのペトロのキリスト告白とは、このすぐ後のできごとです。

この時、このフェニキアの地に生まれたカナンの女が出てきて「主よ、ダビデの子よ、わたしを憐れんでください。娘が悪霊にひどく苦しめられています」と懇願し、イエスにすがりついて来たのであります。自分の娘が悪霊に取り憑かれて苦しんでいるので、いろいろな医者とおぼしき祈祷師やその他の人に頼んだのでしょう。いろいろな手立てを尽くしたけれども全く治らなかった。バリ島などですと、悪霊に取り憑かれた子どもを癒すために村中の人が集まってきて、その子を村人みんなで取り囲んで漫才や歌で一人の患者のために村中が出演者になって、その子の心の健康を回復するような祭りごとをして癒したのをテレビで観たことがあります。

イエスの方針

ところが、ここではイエスは、その母親の懇願に対して何もお答えにならなかったというではありませんか。返事もせず、同情の言葉さえおかけにならない。弟子たちも弟子たちで「この女を追ひ払ってください。叫びながらついて来ますので」。忙しかったのでしょうか、わずらわしかったのでしょうか。にべもないというのはこういう時に使う言葉でしょう。そればかりか、やっと口を開いたイエスは、こんな言葉かけなのですね。「わたしは、イスラエルの家の失われた羊のところにしか遣わされていない」。イエスは、確かに人を癒したりもするけれど、それはまずはイスラエル内部の失われた人たちからなのだとということ。つまりは、イスラエルの中の取税人であるとか、悪霊に取り憑かれた人であるとか、病気の人たちですね。決して総花的ではなく、まずここから、次にどこそこといった形で方針を立てて、行動をしておられたのです。フェニキアとはイスラエルの北側、ここでは今で言うところのレバノンあたりです。

ここを読んでいてイエスの言葉につまづきを感じる人もおありだと思います。いや、何でもかんでも安請け合する人より、こういう方のほうが、信頼ができるという人もおありでしょう。私などでしたら、「ああそうですか。わかりました」と言ってすぐに引き下がり、他に行くことと思いますが、この女性は違いました。イエスの前にひれ伏して、土下座して「主よ、どうかお助けください」キリエ・エレイソン（主よ、憐れみたまえ）とひるまずお願いしたからです。

イエスのつれなさ

これに対してのイエスの言葉は「子供たちのパンを取って小犬にやってはいけない」ということでした。子どもたち用のパンを犬に投げてやってはいけない。子どもたち、すなわちユダヤ人たちのことですね。犬は異邦人を侮辱するという時の常套句でした。ユダヤ人にあげるべきものを、カナン人、フェニキア人なんかにあげてはいけない、というひどい屈辱的な言葉で返してきたのであります。犬と言う時、聖書の中には「あいつは犬だ」と言って異邦人を本当に馬鹿にして言う時の言葉があります。犬から見てもはた迷惑な話です。しかし、一般的に言って人を馬鹿にして言う時に動物がだしに使われるのはよくあることです。「猫に小判」「豚に真珠」「馬の耳に念仏」などもそうです。

さて、ここを読んでいてイエスのつれなさ、冷たさを思った人もおられるのではないのでしょうか。イエスはここで、この女性の信仰に試練を与えて鍛えているのか。「獅子は我が子を崖から突き落とす」とも言います。ライオンはサバンナにいるから崖なんかない、ライオンはむしろ子どもを猫かわいがりするという人もいましたが。

それはともかく、この女性は、イエスの言葉をこのように切り返して答えたのです。「主よ、ごもつともです。しかし、小犬も主人の食卓から落ちるパン屑はいただくのです」。見事ではありませんか。ひるむどころか、最も異邦人を侮辱して言う言葉のところに自らの身をおいて、小犬も主人の食卓から落ちるパン屑ぐらいいいただきますよ、というふうに切り返しているではありませんか。我が子を癒してもらうためには、自らは犬と呼ばれたって構わない。なりふり構わず、プライドも捨ててイエスにすがりつく女性の姿があります。

小犬だってパン屑は

今日のところで注目すべきことは、この女性がイエスが二度も三度も筋どおりの答えしか返してくれないその中に、キラッと光るものを見逃していなかったことです。「子供たちのパンを取って小犬にやってはいけない」という、小犬（クナーリア）という表現です。イエスはここで「おまえは犬だ」と言って完全に突き放すことはなさらなかったのです。ここには「小」がついているからです。婉曲的な表現に他なりません。猫も子猫、悪魔も小悪魔、坊主も小坊主と言うと、何かそこにかわいらしさが入ってきますね。

私は木曜日の晩に放送されている「秘密のケンミンSHOW」というテレビ番組を時々見ています。それを見ていました時、こんなのをやっていました。大阪の人は「おっちゃん」と声かけると「おう、なんや?」と答えるけれど、「おっさん」と声かけると「なんやねん!」と答える。「おばちゃん」はいいけど「おばさん」は距離があるなどとやっていました。「ちゃん」と「さん」でも、反応はずいぶん違うものだなあと思わされました。そういう意味では、この犬というのと、小犬ちゃんというのも大分違うようですね。小犬ちゃん、どこかお茶目な感じがしますし、いとおしさが込められていて、温かいユーモアあるイエスのまなざしが感じられます。

心の通い合い

イエスには確かに伝道者としての方針がありました。しかし、その方針によって、自分の娘のためにわらにもすがりたい女性を切り捨てることはなさらなかったのです。私は伝道師時代に非常に厳しい主任の先生から大目玉を食うような失敗をしたことがありました。いつもキッチリ注意を受けるので、今度はとうとう雷が落ちるかと思っていた時に、「だめじゃないか」と注意され、その目が少し笑っていたので助かったことがありました。叱られながらも受け入れられていたことに気づかされたからです。この女性は、小犬の「小」という言葉を聞き逃さず、小犬だって主人の食卓から落ちるパン屑はいただくのです、と切り返したのです。ここにイエスとこの女性の心の通い合いがあります。その答えが「婦人よ、あなたの信仰は立派だ。あなたの願いどおりなるように」でした。そしてその時娘の病気は癒されたのです。

女と子ども

この箇所を読んでいく時、前後の給食の部分が気にかかります。というのは、14章の13節以下には、イエスが5000人に五つのパンと2匹の魚で満腹させたという場面が出てきますし、15章の32節以下には4000人に七つのパンと少しの魚で給食したという場面が出てきています。両者とも少量の一人分の弁当から満腹したという内容ですが、5000人の方はユダヤ人に向けて、4000人の方は異邦人、外国人に向けた給食と考えられます。共通しているのは、どちらも人数の数え方が「女と子どもを除いて」です。加えてどちらもイエスの弟子たちは、「これだけの人々をどうやって養うことができるか」と「これはお手上げ」だと音を立てているところです。「大体たった一人分の弁当で何ができるか」

「これしかないのだから」と言っているところです。

けれども、その５０００人にも４０００人といった数にも入らなかった女、子どもの中に、当時一人前の人格を認められなかった人の中に、しかも異邦人の中に、イエスが与えるパン屑だけで、娘の病は治ると確信している女性がいた。これはすごいことではないでしょうか。イエスの中心部にいた人よりも周辺にいた人がイエスをよく見ていたということです。それは、ヨハネによる福音書６章で一人の少年がパン五つと二匹の魚を差し出したのとだぶって見えてきます。

もう何十年も前の、ある教会でのことですが、夫がキリスト教嫌いで自分にいやがらせをして、聖書をごみ箱に捨ててしまったり、教会に行けないように暴力をふるわれていた女性がいました。「自分がいるのに今さらどうしてキリストが必要なのか」と言うのです。その人が久しぶりに夫の目を盗んで教会に来られた時、まだ自分の名前が週報ボックスにあったというだけで、涙をぼろぼろ流していました。

命のパン屑

省みて私など教会にいるのが当たり前になってしまっている、その恵みを忘れてしまっていると思わされます。イエスの言葉の一つ一つがパン屑としてもっとかけがえないものとして、それを生きることを読めます。ほんの小さなパン屑のかけらだけでも一つの聖書の言葉だけでも癒されるのですから。神学部のある先生の講演録を読んでおりましたら、その中に「聖書は神様からのラブレターです」と書かれていました。ラブレターならば、想像力を十分発揮して何度も何度も読み返し味わうことでしょう。

私は時々、食前の感謝の祈りで簡単で良い祈りはないものか考えていたことがありました。それが先日ある外国のドキュメントを見ていた時、子どもたちが一様に「神様、いのちをありがとうございます。アーメン」と短く祈って食べ始めるのを見て、これがいいのではないかと思いました。聖書の言葉こそまさに、いつもいのちの言葉をありがとうございますと言って食べ味わうものではないかと思わされました。

２０１４年７月８日 今出川火曜チャペル・アワー「奨励」記録